

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ヒマラヤ杉に降る雪

2000 (平成12) 年4月29日鑑賞

Data

監督: スコット・ヒックス

出演: イーサン・ホーク / 工藤夕貴
/ リーブ・カーニィー / 鈴木
杏

👁️👁️ みどころ

パールハーバー攻撃は、日系人に大きな影響を与えた。裁判を軸に描く人間模様には引き込まれる。ハリウッドスター、工藤夕貴がすばらしい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<美しい映像と日系人の悲劇>

1999 (平成11) 年、第72回アカデミー賞作品賞は「アメリカン・ビューティー」が獲得した。「ヒマラヤ杉に降る雪」は、同じ1999年の作品だが、ただ、撮影賞にノミネートされたただけだった。たしかに、「ヒマラヤ杉に降る雪」というタイトルから連想される雪の場面や、多用される回想シーンを、全体的に流れるおさえた色調でのもの静かなカメラワークは、見事で、美しい映像の連続だ。

しかし、私はこの作品には撮影賞へのノミネートだけではなく、作品賞や、この映画でハツエを演じた主演女優、工藤夕貴に対して主演女優賞をあげたいと思う。それほど、すばらしい作品だ。

映画は冒頭、微妙なカメラワークの中、漁師のカール・ハインが船から放り出されて、溺死するシーンから始まる。そして、カールの頭部には何かで強く殴られた傷があった。翌日、同じ場所で漁をしていた日系人のカズオ・ミヤモト (リック・ユーン) が逮捕され、第一級殺人罪の裁判が始まる。

戦地に赴いたが今は復員し、新聞記者となったイシュマエル (イーサン・ホーク) は、かつての恋人ハツエ (工藤夕貴) の夫であるカズオの裁判を興味深く見守った。

日系人らしく黒髪の美しいハツエは、少女時代、イシュマエルと淡い恋をした。ヒマラヤ杉の洞の中で、2人だけの時を過ごすハツエとイシュマエル。しかしハツエの母は、娘

が白人とつき合うことを許さなかった。「パール・ハーバー」は2人の恋を引き裂いたのである。

この映画の原作は、「殺人容疑」（講談社刊）というベストセラーの長編小説とのこと。この映画のテーマの1つは、日系人少女ハツエとアメリカ人イシュマエルとの恋愛だが、1941（昭和16）年12月7日の真珠湾攻撃に始まった、日米開戦はこれに大きな影響を及ぼした。また日米開戦は、アメリカ在住の日系人で殺人容疑で刑事被告人とされたカズオの父親と、アメリカ人（殺人の被害者とされたカールの父親）との間の土地譲渡契約をめぐるトラブルにも大きな影響を与えた。戦争によって引き裂かれたハツエとイシュマエルの恋は、裁判の場では何の力にもならないのか……。日米開戦によって不可避的な影響を受けた、人間の生き方について、根源的な問いを発している映画だ。

裁判は、日系人のカズオに圧倒的に不利に展開していた。カールの船からは、カズオが使っていたバッテリーが発見され、そしてカズオの船には、カールの血のついた釣竿が残っていたのである。その上、日系人カズオは、父親からケンドー（剣道）を仕込まれていた。すると……。カールの頭部の傷は、そのケンドーによるものと連想された。そして決定的な「動機」は、カズオの父親とカールの父親との土地売買をめぐる紛争だった。すなわち、カズオはカールに対して、あらためてこの問題の解決のための交渉をもちかけていたのだ。土地をめぐる交渉のイザコザは、当然2人間の紛争を想起させた。そのイザコザが、殺人の動機ではないか……。と。また、有罪、無罪を決定する陪審員は、パール・ハーバーから10年経った今も、決してこれを忘れてはいない。陪審員は、「につくき日本人、日系人」という偏見から離れて、フリーな目で判断を下すことができるのか……。どうみても、カズオの有罪は確実のように思えた。しかしハツエは、審判の行方をどうすることもできず、ただ傍聴席で成り行きを見つめるだけだった。

こんな中、イシュマエルは、昔の猛吹雪の記録を捜すため灯台へ行き、そこでカールの死亡時刻に、大型貨物船がすぐ近くを通過したという無線記録を入手した。この大型貨物船の波を受けて、カールの漁船が転覆したのではないかと……。そう考えれば、すべての説明がつく。そしてそうであれば……。当然、カズオは無罪。しかしカズオは、かつての恋人ハツエの夫となっている身であり、いわば、イシュマエルの恋仇だ。戦争の相手たる日系人だ。そんなカズオを無罪とするために、なぜ自分が動かなければならぬのか……。イシュマエルの気持ちは揺れる。しかし、結局は……。

<「パール・ハーバー」を上回る大傑作>

この映画のテーマは難しい。だから、この映画は観ていて、しんどい。それは確かだ。

2001（平成13）年7月に公開された、映画「パール・ハーバー」とは全然違う視点から、「パール・ハーバー」の悲劇と、そこに登場する主人公たちの人間性を描いている。すなわち、第1に、話題作「パール・ハーバー」のような派手な戦闘シーンは全くない。第2に、映画「パール・ハーバー」における、「陽気なヤンキー」たち3人が展開する、苦しいけれども、どこかカラッと明るい友情や、恋愛ストーリーもない。ほのぼのとした気持ちになるのは、14歳のハツエが、心を許し合ったイシュマエルと2人で時を過ごし、ヒマラヤ杉の洞の中で初めて交わすキスシーンくらいだ。

しかし、それでも私は映画「パール・ハーバー」よりこの作品の方が好きだし、アカデミー賞を受賞して欲しかったと思っている。

工藤夕貴は、この映画の公開前からかなり話題にのぼっていた。彼女はオーディションでこの役を射止めたのだ。日本人女優がハリウッド映画で主役を張る、というのは前代未聞のことだ。彼女が英語のしゃべり方をはじめ、ハツエ役になりきるために、どれほどの努力をしたか、想像するだけでもすごいと思う。その姿を一度テレビ番組で観た記憶がある。

工藤夕貴は20歳の時も、1991（平成3）年の「戦争と青春」に出演し、ブルーリボン賞などを獲得した、可愛いアイドル系の顔立ちの女優で、私もこの映画を観た時からそのファンになった。しかし、この「ヒマラヤ杉に降る雪」での演技は、「アイドル」というレベルをはるかに超えた素晴らしいものだった。アメリカ映画雑誌が「21世紀に活躍するハリウッドの女優」の1人に数えたのも十分うなずける（もっとも2001（平成13）年の今、女優工藤夕貴の活躍ぶりがあまり伝わってこないのは気になるが・・・）。

1人での時間がたつぷりとある時、あるいは恋人と2人でゆっくり過ごす時、じっくりと鑑賞し、味わって欲しい、最高傑作である。

2001（平成13）年9月記